

# 経営と健康

第3回

## 栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講師 一龍斎貞花

吉田松陰は、密航しようとしてアメリカの船に乗るも見つかり、捕えられ幽閉される。この幽閉されている時に書いた「幽囚録」の中で、「蝦夷・北海道の地を開墾して諸侯を配置し、隙に乗じてカムチャツカ、オホーツクを奪い、琉球を論じて内地の諸侯同様参勤させ、朝鮮を攻めて人質を取って日本の朝廷に貢物を持って挨拶にこさせ、北は満州の地を割き取り、南は台湾、ルソンを攻め、漸次進取の勢いを示せ」と、すごい強硬論。松下村塾でこういう指導もしたんでしょう。明治維新で重要な働きをする多くの若者に、大きな影響を与えた松陰、強い日本を作りたいという気持ちだったんでしょう。

シアの進出を防ぐためも明治時代。靖国神社には、戊辰戦争以後の官軍の人達が祀られているが、吉田松陰、坂本龍馬は戊辰前ですが、長州・土佐の人であり、維新の先駆けをしたからということでしょう、祀られています。西郷隆盛は、西南戦争で賊軍となったので祀られていません。現代なら、松陰の思想は大叩きされることでしょう。

幕府に改革を促すため、朝廷は公卿大原重徳を勅使として江戸へ派遣。警護役として随行した薩摩藩国父島津久光は、幕府に対し、「將軍は、諸大名を率いて上洛すること。一橋慶喜卿を將軍後見職に、松平春嶽を総裁にすること」を申し入れるや、幕府は、はねのける力なく、これがすんなり通り、意気揚々江戸を立ち、横浜の生麦村に差しかかったところ、イギリス人が大名行列を横切つたので、一人を殺害、二人に重傷を負わせた生麦事件。この事件が、文久三年薩英戦争に発展。

英国側死傷者六十三名、薩摩二十一名。城下は焼かれ最新工場機の集成館も焼かれてしまった。大砲も総て破壊されてしまった。翌日イギリス軍が軍艦から望遠鏡で見ると、なんと一夜にして大砲がずらりと並んでいるので驚いた。実はお寺から釣鐘を集めて並べたので大砲と間違えちゃった。誰が考えたのか、うまいこといったものです。軍艦が現れた時、驚天したものの、アメリカ人を驚かせようと、力士に左右の手に米俵を一俵ずつ持って運ばせ、日本人はすごい力持ちだと驚かせたこともあります。

イギリス艦隊が引き上げたので薩摩の勝利と伝えられ、攘夷派は、「久光公は、本物の攘夷派だ」と大喜び。

しかし、薩摩藩は、イギリスの武器や、科学技術の違いを思い知らされ、攘夷は無謀なことと考えるようになり、イギリスから多額の賠償金を要求されるや、薩摩藩影の宰相と言われる若き家老小松帯刀が、幕府に掛け合い七万両を借りて賠償金を支払い講和が成立。七万両もの大金を貸してもらったので、小松の交渉力は大きいですから、小松の交渉力は大きいです。戦災復興に努めるものの、米を焼かれてしまった。

この時人吉藩が、大火復興資金五千両を借りた時、小松が快く貸したばかりか、大工、左官、瓦屋、桶屋など多くの職人を人吉に送って復興に当らせるなどの支援活動。人吉が五千両の返済として米を送ってくれたので、食糧難を切り抜けることが出来ました。情けは人の為ならずです。

薩摩藩影の宰相、小松帯刀

小松は、イギリス商人グラバーと親

交を結び、科学技術の導入。かつての敵を味方として協力させることに成功。帯刀の外交手腕、もつともグラバーも商売になると読んだこともありましょう。以後多くの取引をします。

小松は、公武合体派の一橋慶喜、松平春嶽、山内容堂、伊達宗城、松平容保や、公卿たちとも交渉を重ね、薩摩の家老として認められるようになり、薩摩の金を握っている若い美男の帯刀は、芸者、舞妓の人気の的。

「若くてええ男はん、まあ二十九歳で家老、えらいお人ですな、わてお酌してきます」

入れ代り、立ち代りお酌にくる。

「小松氏一人でもてている、羨ましい限りだ」

「いえ、女子はとんと苦手でござる」

「それだからもてるのだ。言い寄ってくる男より、なびかん男を好きになるのが女心というもの」

「そうですねー。私など、どうも無愛想で」

やがて和歌もたしなみ、十六歳で押しも押されぬ名妓となった美女のお琴が、帯刀に想いを寄せ、帯刀もこよなく愛し側室に致します。帯刀が息

を引き取るまで付き添い、

「私が死んだら、小松公の側に埋めて下さい」と遺言し、帯刀のお墓の側に、お琴のお墓が建てられています。

元治元年正月、将軍家茂上洛。

「討幕を企てている長州を討伐せよ」と薩摩他十藩に準備を命じ、松平容保を軍事総裁に任命。

「殿、こうした情勢の中、有力諸侯や、勤王の志士と面識のある西郷の力が必要です」

小松・大久保が再び隆盛起用を進言。隆盛嫌いの久光もしぶしぶ承諾し、流罪を解き薩摩軍賦役(番役・軍役)に就任。

そうこうするうち、「御所に火をつけ、会津容保を討つ」という志士の襲撃計画が発覚。集結していた池田屋を急襲。この池田屋事件をきっかけに蛤御門で開戦。

先頭に立った薩摩が長州を征伐、長州に同調していた三條実美はじめ七卿落ち。

この結果を報告するため小松が帰国するや朝廷は、「小松が居なくては困るので、すぐ都に戻るよう」と、久光

に手紙を出したほど。帯刀がいかに重要な人物になっていたかが判ります。

帯刀はグラバーに依頼して汽船二隻を購入し、海軍の充実を図り、汽船を動かす航海術は、ジョン万次郎こと、中浜万次郎を招いて指導を受け、

「軍艦や商船を、長崎まで修理に出したのでは金がかかる。買うばかりでなく、自ら造ったり修理しなければいけない。藩のため、将来のために今から準備しなければいけない」と考え、集成館再建、蒸気機関鉄工所を設営。

久光・忠義親子は、小松を信頼して任せるので集成館事業はどんどん進められていきます。

坂本龍馬、勝海舟に弟子入り

坂本龍馬は、土佐を脱藩し志士たちと行動。

「幕臣の勝海舟が、開国論を唱えているのはおかしい、斬ってしまえ」と

押しかけたが、咸臨丸でアメリカを視察してきた海舟は、

「外国はまず商いをするために来ているのだ。日本は長い鎖国で総ての面で外国に遅れている。そんな外国と戦ったら、国土を攻め取られ、植民地にされる恐れがある。日本が負けんようにするにはまず外国と交易し、西洋の文明を取り入れ強い海軍を造りあげなければいけない。海外の事情も知らず攘夷と騒いでいる君達若者が立ち上がって、天皇を中心に幕府や各藩が一つになって日本を守るのだ。おいらが攘夷に反対するのはそのためだ」

こんこんと説く海舟の言葉に感動した龍馬は、斬るところか海舟の弟子に。

やがて、西郷、小松、坂本の三人が意気投合。時代が大きく動く薩長連合へと進展していくのでございます。次号お楽しみに。ポポポポン。

